

二人のわらべ



No. 555

令和7年10月15日

天童市教育委員会

学校教育課

人とまちと時をつなぐ わたしの図書館



天童市教育委員会

生涯学習課長 押 野 一 貴

まもなく、市立図書館のリノベーション工事が始まります。設計は、リノベーションの第一人者である東北芸術工科大学教授 馬場正尊さんによるもので、工事期間は今年11月から令和9年1月までの1年以上にわたる大規模なものとなります。工事後の図書館は、蔵書が20万冊から24万冊に増え、そのうち開架書架は8万冊から12万冊へと1.5倍になります。閲覧スペースも広くなり、座席数も現在の60席程度から200席以上になるほか、靴を脱いでくつろげる小上がり空間もできます。一人ひとりがお気に入りの自分の居場所を見つけ、快適に過ごすことができるようになるでしょう。美術館との間に増築する建物には、お洒落なカフェができて、美味しい飲み物を片手に読書ができますし、読書に疲れたら美味しいお菓子でほっと一息つくこともできます。読み聞かせができるちびっこプレイスや子どもトイレ、授乳室などの機能や設備が充実した、いわゆる“いまどきの図書館”となります。

ところで、こんな図書館になったら、皆さんはどのように利用したいでしょうか。それ以前に、そもそも図書館とはどんなところなのでしょう。一般的には、“静かに本を読むところ”、“本を借りるところ”といったイメージを持たれているかと思います。図書館法には「図書、記録その他必要な資料を収集し、整理し、保存して、一般公衆の利用に供し、その教養、調査研究、レクリエーション等に資することを目的とする施設」と書かれています。これを読む限り、特に私語は厳禁とか、静かにしなければならないとは書いていませんが、これまではなんとなくそのような認識

をされてきたと思います。また、図書館は本を借りるところだから、できるだけ蔵書を増やすためには閲覧スペースはない方が良く、つまりは本を読むところではない、とされていた時代すらあります。

一方で、外国の図書館ではおしゃべりや飲食がOKで、対話や賑わいを生み出すところとされているそうです。

果たして、これからの天童市立図書館はどちらの方向が望ましいのでしょうか。

リノベーション計画をつくるにあたり、アンケートやヒアリング、デザイン会議などを実施したところ、たくさんの意見が寄せられました。その中で多かったのが、子どもが泣いたりしゃべったりするから行きづらいというものでした。こうした利用者も含めて、気兼ねなく多くの人に利用いただける施設としていくため、館内にはBGMが流れ、飲み物を片手にあちこちで会話がみられる、少しざわざわした図書館が望ましいのではないかと考えています。

リノベーション後の図書館はすべての利用者にとって開かれた図書館になって欲しいと願っています。図書館の設計を多く手掛ける三浦丈典さんがおっしゃっていました。「これからの図書館はトレラント（寛容）でインクルーシブ（包摂）でなければならない」と。これが実践できたとき、「わたしにとって居心地の良い場所はみんなにとってもとびきり居心地のよい場所 その時、わたしの図書館はみんなの図書館に」なるのだとおもいます。みんなにとって良い図書館を一緒につくっていきましょう。

よろしくお願ひします！

8月から天童で働くこととなったALTからメッセージを頂きました。

Jessica Wak ジェシカ ウェイク

出身国： ニュージーランド ウェリントン

配置校： 第一中学校 ・ 荒谷小学校



私の名前はジェシカ・ウェイクと申します。ニュージーランド出身です。日本に來られてとてもワクワクしています。天童夏まつりをはじめ、すでに素敵な思い出ができました。私の故郷ウェリントンはニュージーランドの首都で、風の強さとカフェの多さが有名です。天童の魅力について学ぶのを楽しみにしています。

ボードゲームを楽しむのが好きで、天童にいる間に将棋を習いたいと思っています。その他の趣味は散歩とケーキ作りです。天童の方々はこれまでとても親切にしてくださいました。これから多くの方とお会いできるのを楽しみにしています。

寺津小、第三中を担当しているALTのダコタからのメッセージです。ダコタは日本語が堪能で、漢字混じりの文章もすらすらと書くことができます。タイトルは「アメリカの教育が日本から学べること」です。

What is the most important skill in life? From language arts to ethics, there are countless things we might want to inculcate in children through education, but I think the most important of all is an independent spirit. In my time in Japan, working in the education system here, I have been continually impressed by the efforts made to develop this spirit. At the school I work at, Tendo 3rd Junior High, the motto is “*mizukara handan, mizukara kodo*”—think for oneself, act for oneself. From the serving of school lunch, to the running of school activities, right down to the cleaning of the school building itself, many things are trusted to the students themselves. In my home country of America, this would be unthinkable. Of course, it’s a great experience for the students to be able to assume leadership roles, debate amongst themselves, and see their plans put into action. But I think even more than that, the experience of *having responsibility* is of utmost value. From my observations, children in America are afraid of failure. We protect them from failure and disappointment, and end up creating people who cannot deal with failure and disappointment later in life. They don’t learn to work in organizations, and at work find they cannot voice their opinions or act without being told – because they are afraid they will fail. I have met many young Americans like this. Actually, language learning is the same: it’s embarrassing to make mistakes, but if you don’t, you will never improve. I think the style of Japanese education which values the experience of “failure” is something to be proud

人生で最も大切な力はなんでしょう。数学や英語、国語から道徳に至るまで、教育で子どもに教たいものはさまざまだが、最も大切なことは「自立心をもつ」ことだと思う。来日して日本の教育に関わってから、常にその自立心を育む取り組みに感心している。私の勤める天童市立第三中学校では「自ら判断、自ら行動」をモットーに掲げている。給食の配膳を始め、生徒会行事や部活動から校舎の清掃まで、色んな場面で物事は子どもたちに「任されている」。母国のアメリカでは、こうした光景はなかなか見られない。リーダー役を担って、意見を交わし、計画を実行に移す経験は、非常に貴重だ。でもそれよりもっと、「責任を持つ」という経験が大切だと思う。子どもが主導だとももちろん失敗も発生するが、これもすごく大事な経験である。私が思うに、アメリカの子どもは失敗を恐れる傾向にある。アメリカでは子どもを失敗や落胆から守ろうとするあまり、結果としてそれらに対処できない大人を育ててしまっているのではないかと感じる。組織で自分から動けない、自分の意見が述べられない、何故なら失敗を恐れているから。そんな若者たちに、私は何人も出会ってきた。実は、語学も同じだ。間違えることは恥ずかしいことかもしれない。しかし、間違えなければ上達もない。そう考えると、日本の教育が「失敗」そのものを貴重な学びの一部と捉えている点は、誇るべき文化だと私は感じる。